第 3 章 名勝旧齋藤氏別邸庭園の本質的価値

第 1 節 庭園の本質的価値

新潟砂丘を活用した池泉回遊式庭園　江戸期において新潟の清酒問屋であった齋藤氏は、近代以降、海運業・銀行業などを通じて新潟を代表する新興実業家へと成長を遂げた。第 4 代当主の齋藤喜十郎（庫吉）は、大正 6 年（1917）から同 9 年に新潟砂丘の東南縁辺部にあった旧料亭の敷地を入手して別邸を営んだ。開放的な和風建築を砂丘の低地部に建て、庭園は砂丘地形を利用した独特の意匠・構成を有するものであった。作庭の実際には、東京根岸の庭師で、東京・西ヶ原の渋沢栄一邸庭園等を手掛けた 2 代松本幾次郎とその弟の松本亀吉が関わった。

本庭園は、わが国屈指の大砂丘といわれる新潟砂丘を敷地内に含み、高台、斜面、低地の地形的変化に富んだ土地に造営された。面積約 4,500 ㎡の敷地内に格式のある玄関庭、趣のある中庭、自然の砂丘地形を巧みに生かした主庭、砂丘上部には茶庭を構成したものである。主庭には池泉を配して園路で連絡した池泉回遊式庭園となっている。

低地には、主屋、離れ、土蔵を雁行形に建ててその周囲に芝生を主とした平庭を配し、池は砂丘の後背に穿たれた。高台には接客空間として千家流の茶室と茶庭を設け、敷地外への遠望を可能にする高台端部の展望地点に待合、田舎屋を配置した。斜面には高低差を利用して豪快な大滝と流れを設けつつ、既存のマツ林にモミジを加え、自然のたたずまいを創出したものといえる。

あわせて、阿賀野川の上流域で採石した石材を多用し、主屋縁先の鉢前には佐渡赤玉石を据えるなど、地域に固有の石材を多用する点も注目できる。大正期における港町・商都新潟の風土色豊かな庭園の事例として優秀な風致を伝える旧齋藤家別邸庭園の本質的価値は、以下のように整理できる。

庭園の連続性と重層性

本庭園は、明治 26 年（1893）まで当地に存在していた堀田楼から新潟市の公有化に至るまで、島清館、島村医院、齋藤家、連合国軍、加賀田家のように、実に多くの所有者変更が生じた。ただし、堀田楼起源の滝と池による水景、斜面から高台にかけての地形と松林という枢要な構成は継承しながら、大正期には齋藤家により、意匠的・技術的・材料的にも本庭園の到達点が示された。昭和後期には連合国軍による接収を経て加賀田家の手に渡り、改変された要素が確認されるものの、庭園はその景観・機能を滅失することなく連続し、各期の所有者が前時代の姿景に重層的に手を入れ、存続したものである。齋藤家の所有時期を中心とし、各期の作庭痕跡を庭園現地において確認することもほぼ可能である。

したがって旧齋藤家別邸庭園は、庭園の連続性と重層性とを具備した遺構であり、新潟の財閥の庭園の誕生から現在に至るまでの履歴を、具体的に辿れる事例として重要である。

新潟砂丘の地形を活用して造営された近代和風庭園の地割

本庭園は、砂丘地形の高低差を利用して平地には開放的な主屋と土蔵等付属屋を配し、斜面地には田舎屋、高台には茶室と待合を設けた。建造物が高低差を意識した地盤に設けられているとともに、特に主屋は多様な座敷空間から構成され、ガラス戸の外部建具を戸袋に収められる開放的な造りをほどこしており、庭園と室内とが密接な関係を持っていた。庭園の地割は上記の建造物を庭園の構成要素としつつ、主屋前庭にあたる「玄関庭」、主屋と塀で囲まれた「中庭」、砂丘の後背湿地を利用して設けられた池泉と園路を縦横に配した斜面および主屋前の芝生を含む「主庭」、砂丘上部の「茶庭」に空間がまとまっている。

以上 4 つの庭園地割が砂丘地形の特色を発揮しつつ築造され、建造物群とも渾然一体の庭園として造営されている点に、空間構成上の完成度の高さが認められる。

自然主義を基調とした庭園の近代性と作庭技術

本庭園は、近代東京を代表する庭師、２代松本幾次郎とその弟亀吉が、既存の松林にモミジを配して自然風の疎林を創出し、大滝と渓流、山路のような園路、竹林が渾然一体となった山中のごとき環境の形成に成功した。この様相は、東京や京都の近代数寄者の「自然主義」を基調とする庭園と共通し、本庭園も近代に顕現した自然主義庭園の事例と評価できる。本庭園は、明治中期以降確立される自然主義庭園が、大正後期において新潟に波及した事実が造園史上確認できる点で重要であり、しかも、２代松本幾次郎と松本亀吉の作品がほぼ完全な形で残っている稀有な遺構としてすこぶる貴重である。

造園材料としては、大正期以降の近代造園に導入され始めた筑波石を多く用い、浩養園の欄干を景物として利用し、滝からの落水にあたって水道と電気（ポンプ）という近代設備を利用するなど、近代の造園技術・材料を考えるうえで見逃せない。

新潟に造営された庭園の地域性

本庭園は、旧来の砂防林を庭園植栽に生かし、砂丘と砂防林といった近世以来の新潟の郷土景観を名残としてとどめている。特に、茶庭に現存する根上がり松は、砂防という機能から本庭園の特色を表す景物として位置づけを革新したものである。また庭石について、主庭の滝や流れでは、阿賀野川上流で採取される幻の名石、海老ヶ折石を豪快に用い、加賀田家時代には、阿賀野地域から産出する安田御影を飛石や階段に多用し、中庭、茶庭では、佐渡で使用された鉱石を挽く石臼が飛石として転用された。

以上から本庭園は、立地環境や庭石といった材料において、新潟という地域性が色濃く発揮されている点で価値がある。

なお、新潟市旧齋藤家別邸という公的な文化施設として特筆すべきことは、庭園と建築ともに、良好な保存状態にあって観賞性を備え、主屋の広間、主庭の芝庭など、一定の来訪者を収容する空間が確保されていることである。したがって本別邸は、単なる見学等に

とどまらない、多面的活用が可能な点で、地域資源として重要である。

また、本別邸が所在する西大畑およびその周辺には、北方文化博物館新潟分館、旧日本銀行新潟支店長役宅（砂丘館）、旧市長公舎（安吾　風の館）、新潟市美術館など、文化的な資源が多く存在する。本別邸は、それらの資源のほぼ中央に位置することから、本地域の文化的資源の拠点的存在としての可能性を有する点で貴重である。

図 3－1　　旧齋藤氏別邸庭園全体平面図

第 2 節　庭園の地割と構成要素

指定地全体と景観

庭園の地割　　旧齋藤氏別邸庭園の敷地内には、玄関庭、中庭、そして広大な主庭の 3 つの庭園が建物を中心に配置され、園路で結ばれている。主庭内の山頂には茶庭があって独立している。また、敷地の南東には増築棟にともなう管理用地（南東管理用地地区）、北西には倉庫が配置された管理用地（北西管理用地地区）、が存在している（図 3－1）。

庭園の景観構成の特色

仰角型広角景　　建物 1 階座敷からの眺めは､自然地形である斜面を強く印象づけている。視線は水平方向から徐々に上部へと導かれ、庭園景が上下に展開して、より立体的に見えてくる。また、ここからは両翼に広がるワイドな景色も同時に味わえ、サルスベリ（夏を代表する花木）はここからよく見える位置、東側奥に植えられている。しかし、現在は樹木に遮蔽されていて見えない（図 3－2）。

俯瞰型集中景　　2 階からの眺めは、正面の樹海・紅葉谷と池の水面そして動きのある大滝にそれぞれ集中するように構成されている。西側小間からの眺めは、大滝の滝口一点に視線が集中しており、迫力のある景色と連動している：現在は樹木に遮蔽されていて見えない。このように 1 階、2 階で全く違う見え方・見せ方は県内では類がなく、特に庭園全体を見下ろす景色は特異である（図 3－2）。

庭園の各視点場からの景観　　次に庭園内における園路動線と視点場から、景観の特色について述べる。

庭園西側、橋上からの視点（図 3－4②）。東西に長い池（約 36m）を介して奥行きを創出し、夏季はサルスベリの花が背後の深緑と好対照をなす。

田舎屋までの道程と視点（図 3－4③）。②から③へ筑波石でしつらえた山道（階段）を登り、山の奥へ分け入るような雰囲気を演出する。モミジや竹林を縫うように園路を右へ左へと振り、その先に大ぶりの筑波石が視線を引き締める。山腹の田舎屋は、滝・流れの音と冷気を感じさせる装置として、あたかも山中のごとき環境を知覚させる。

図 3－2　仰角型広角景

図 3－3　俯瞰型集中景

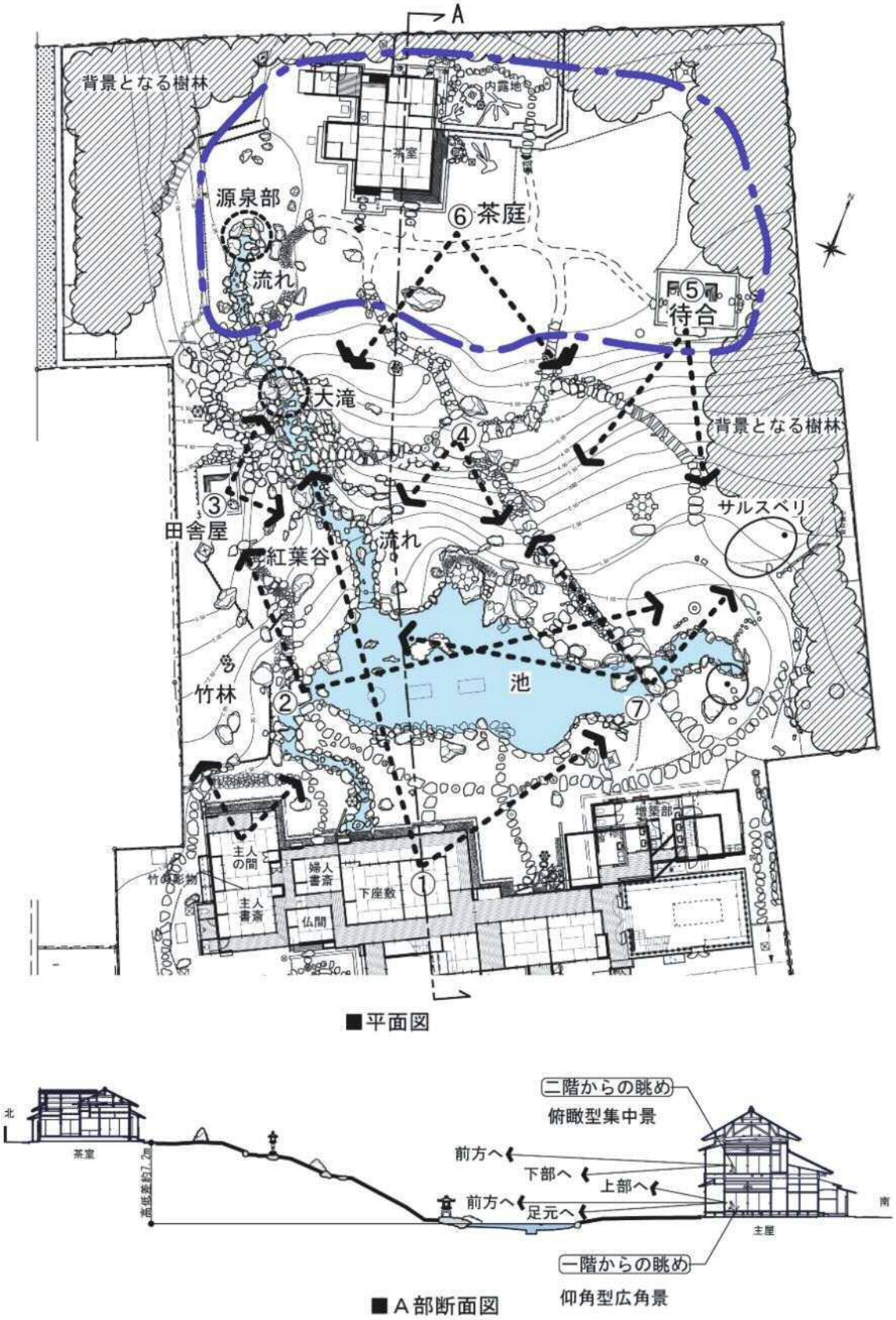


図 3－4　　主庭の景観構成と視点場

中腹の広場までの道程と視点（図 3－4④）。田舎屋から飛石を伝い、渓谷を経て中腹に至る。中腹の広場は敷地内で唯一、四方の園路が交差する動線上の要所であり、ここからは主屋の凛とした正面性を顕在化させる視点場ともなっている。

待合からの視点（図 3－4⑤）。主屋の芝庭より約 7.2m 高い場所に位置する。礼拝石が南側への展望（寺院の甍の波と、空の広さ）を認識させる視点場となる。また、茶庭（図 3－4⑥）も眺望を特色とする。

東側橋上からの視点（図 3－4⑦）。橋の西側の島には「浩養園」より運んだ石製の欄干柱があり、「おなりはし」と刻んで格式の高さを示す。この視点場からは西側に池の水面の広がりと奥行きを演出し、かつ丘上への階段を隠見させることにより期待感と高揚感を誘発させる。この階段は段鼻の筑波石と、踏面の洗い出しによって瀟洒な仕上げとする。

玄関庭　重厚な瓦葺正門から正面玄関に至る広さ約 50 ㎡の独立した空間で、中庭へはここから西側の庭門（結界）を潜り出入りする。アプローチは雪を通路脇に積んでも支障のないよう降雪に対応して幅広く取られ、御影切石（800×400㎜／枚）を縦使いにして 4 枚並べ、両脇を細身の同切石（800×140㎜／枚）で押さえ縁取りが施してある。線形は全体に緩曲線を描き、近代庭園に多くみられるモダンな意匠である。

植栽はアプローチを挟んで左右両側に施され、左（西側）には大ぶりの門冠りクロマツ（幹周 1.3m）を中心にモッコク大小がバランスよく植えられている。

銅製灯籠（高さ 2.4m）は景色の中心で、「昭和九年戊秋造北越地蔵堂住人御釜師堀政五郎」の銘がある。景石は 2 石で、そのひとつは刀掛け石に似た形状で銅製灯籠前に据えられ、灯入れの際の踏石も兼ねる。他方、右（東側）の奥まった建物角隅には笠形樹冠のクロマツ（幹周 1.1m）が天空を覆い、その根元に八角形灯籠（高さ 2.1 m）が据えられ、これが景の中心となる。景石は 2 石で小ぶりのものは灯籠手前に据えられやはり踏石を兼ねている。植栽は低木（サツキ類）3 株のみで主構成種はモッコク。両クロマツはそれぞれアプローチ上に枝を差し出し、影を落として陰影のコントラストが面白い。建物際には雨落溝（自然石、加工石）が付設され、一部に那智黒石が敷かれて雨水に対応しているが、排水機能が不十分な所も見受けられる。全体的に格式のある趣である。

中庭　大ぶりの飛石（御影石）を軸線にしてその周りに植栽を施した平庭形式の空間である。植栽は、塀際にクロマツが並び、その間をモッコクが叢立つ。このクロマツは沿道から塀越しに見え、風情のある古き良き町並み景観をつくっている。モッコクは主屋近くに多く、庭園の陰影を演出し、中庭のほぼ中央には下枝を払ったイスノキ、カリン、モミジ類が植えられ、その樹幹を通して視線をさらに先に誘う遠近効果も感じられる。カリンは商売繁盛を、南西角隅（裏鬼門）に植えたザクロは災いを遠ざけて吉を呼び込む子孫繁栄の意味が込められているのであろうか。ここでの主要な構成要素はふたつある。ひとつは堀井戸で、四角の井筒を配して木製の釣瓶で水を汲み上げる車井形式で、井筒を蹲踞のように扱い大型の海に配置する形態。また、この井筒に面した建築の壁面の外装を網代張

りとする意匠は、煎茶趣味の庭園で常套的に用いられる形であり、井筒を中心とした本空間は、多分に煎茶的な様相が色濃い。もうひとつは蹲踞の意匠である。司馬温公形に似る自然石の手水鉢を向鉢形式で組んでいる。役石は鞍馬石で三方を囲まれた建物脇に組まれ、この空間は四つ目垣で仕切られ独立している。

主庭　主庭は、池を中心に配した池泉回遊式であり、砂丘地形を利用して築山とし、マツとモミジの斜面植栽によって深山幽谷の世界に仕立て、斜面には滝や階段を巧みに設ける。

その大滝は主庭の構成要素として重要なもののひとつであり、地元産の海老ヶ折石を多用して豪快に石組を施す。渓流状の流れ、池に流水を注ぐ小滝が清涼な水音を演出し、斜面のマツとモミジによる植栽、斜面を右左に蛇行して地形にあわせて設けられた山路のような階段園路など、多分に自然主義的な様相を推進した近代和風庭園の好模範といえる。池は河原石と筑波石、海老ヶ折石などいくつかの種類の石で護岸を施し、海老ヶ折石を主とした岩島を浮かべる。主庭前面は、安田御影や佐渡鉱石による飛石を配した芝生となる。主庭には鉢前と蹲踞があり、庭園の重要な景物となっている。主屋 1 階の広間前主庭に面した鉢前は、涌泉で、溢れ出た水は細い流れを通り池に落ちる。庭園の全体構成からみて機能上重要な位置にある（利用、近景かつ水音を聞くなど）。形式は、濡縁先手水の石組で、水源は現在埋設された細管を通る水道水とする。役石は前石に海老ヶ折石、清浄石・水汲石には佐渡赤玉石、蟄石、手水鉢には鞍馬石を使用する。また、主屋中央の廊下に付設して組まれた鉢前は、関係する建物付近が改変されたこともあり、建物や周りとの関連が断ち切れている。手水鉢は棗形、鉢明りの灯籠は春日形とする。当時、作庭に地元の石屋が関わっていることもあり、地元産の景物とすれば技術的に貴重であろう。

茶庭　茶庭は、斜面上部の平地にあり、広間・小間の 2 室をもつ茶室が建つ。茶庭には露地門がないが、二重露地の形式とする。外・内露地内にはそれぞれ根がむき出しになった珍しい根上り松がみられ、内露地には四方仏の手水鉢、生込み灯籠を設置して飛石を打ち、全体の構成をシンプルにまとめている。外露地の東側には外腰掛待合があり簡単な雪隠が付設してある。茶室脇に構成された内露地との境には中潜り（中門）を設け、外露地と内露地を分けている。内露地には蹲踞を組み、露地としては正式な茶の形式を整えており、茶事（茶会）のために構成された庭である。小間席前の根上がり松（古木）の株元には、中鉢形式の蹲踞（四方仏形手水鉢）が組まれる。根上がり松とともに幽玄な雰囲気も創出している。また、同露地内に打たれた佐渡金銀山で使用されたと思われる鉱山臼を飛石に見立て利用した造形は貴重であり、地域色も出ている。

管理用地　南東管理用地地区は、増築棟に付属して身障者のためのスロープが設置され、庭園管理等において管理動線や管理道具を保管する場所として使用される。主庭に開く門から通用門の方向へは、常緑樹を主とした高木が植栽され、飛石が打たれている。

北東管理用地地区は、庭園管理に使用する道具類、資材等を収納した小屋が置かれ、剪定枝等のストックヤードとして使用される場所である。また、周辺は樹林である。

図 3ー5　玄関庭のアプローチ

図 3ー6　中庭の井筒と燈籠

図 3ー7　司馬温公形に似た手水鉢

図 3ー8　佐渡赤玉石を用いた鉢前

図 3ー9　主庭の大滝

図 3ー10　茶庭の蹲踞と根上がり松

表 3－1　庭園の本質的価値を構成する諸要素

構成要素	玄関庭	中庭	主庭	茶室	南東管理用地	北西管理用地
地割・地形	平場	平場	平場 砂丘地形の斜面	平場	平場	平場
石組・景石・敷石・砂利・敷砂	御影石園路 景石 飛石	景石 飛石	護岸石 岩島 景石 滝石組 沢渡石 階段石 飛石 橋石 沓脱石 層塔台 鉢前石組	滝口流れ 景石 階段石 飛石 沓脱石 蹲踞石組	飛石	
石造物	灯籠	灯籠 手水	灯籠 鉢前 役石 手水 層塔 橋杭形灯籠（欄干） 石柱 石像	灯籠 手水 層塔		
庭園工作物	袖垣	袖垣 四つ目垣 井戸釣瓶	袖垣 四つ目垣	袖垣 竜安寺垣 四つ目垣 筧		袖垣 四つ目垣
園池滝・流れ			鉢前からの流れ 大滝、小滝、 渓流状の流れ 池	滝口		
植栽	門冠り松（クロマツ） 仕立松（クロマツ） モッコク ツツジ類 その他の樹木	仕立松（クロマツ） モッコク カリン ザクロ その他の樹木	竹林 仕立松 自然松（斜面） モミジ林(斜面) サルスベリ その他の樹木	モミジ林 根上り松 自然松 その他の樹木		
構造物	レンガ造漆喰塀 表門 潜り門 仕切り塀	レンガ造漆喰塀	庭門	中門 仕切り塀		
建造物	主屋 土蔵		田舎屋	茶室 待合		
その他			田舎屋から池泉、流れ、大滝を望む景 斜面中からの主屋、池を望む景	待合からの主屋と池 及び主屋腰に市街地方向を望む景		

表 3－2　庭園の本質的価値を構成する諸要素以外の諸要素

構成要素	玄関庭	中庭	主庭	茶室	南東管理用地	北西管理用地
庭園工作物	ななこ垣・結界 注意札	ななこ垣・結界 注意札	ななこ垣・結界 注意札	ななこ垣・ 注意札	通用門	袖垣 四つ目垣

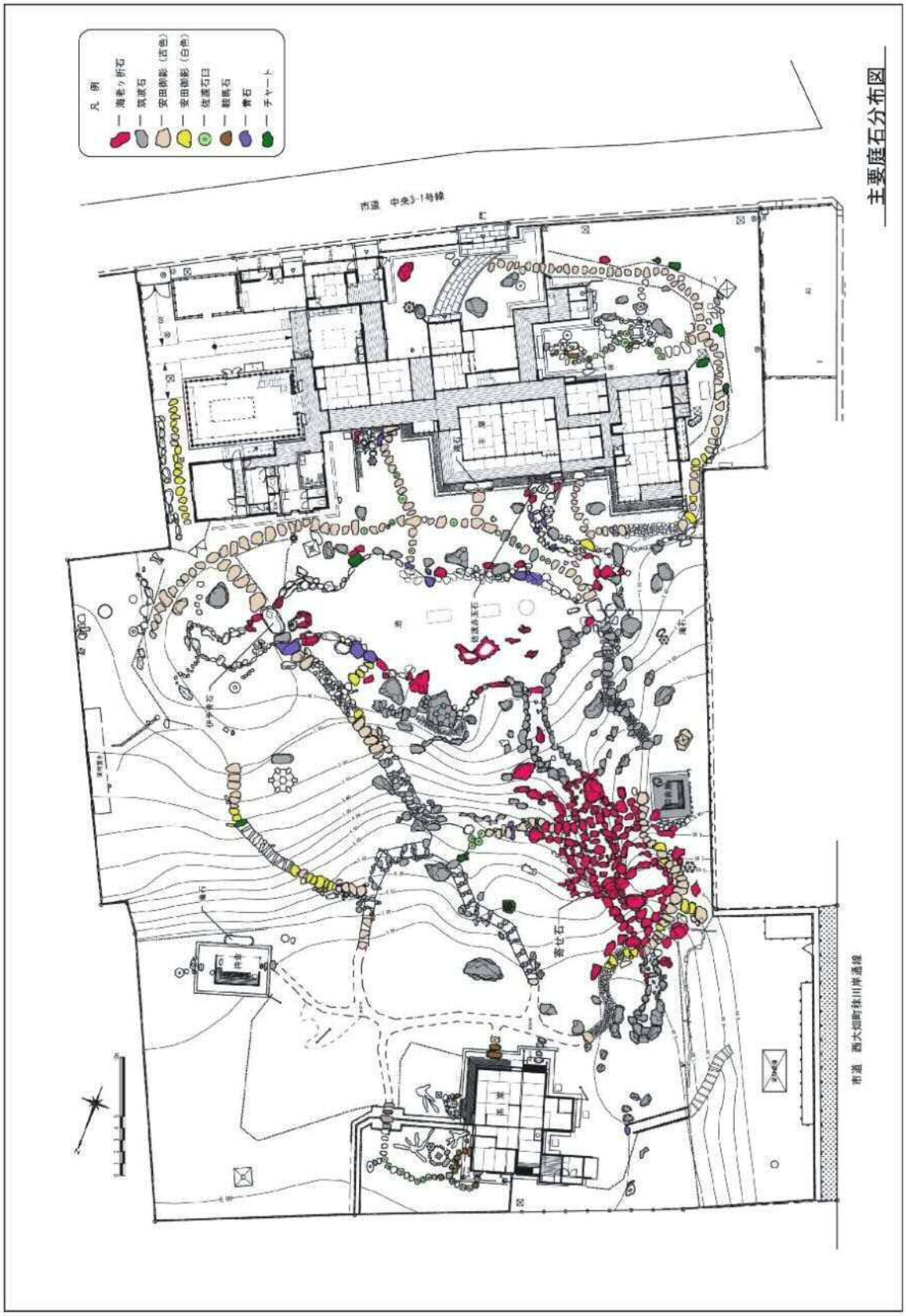

主要庭石分布図
凡例
海老ヶ峠石
筑波石
安田御影（赤色）
安田御影（白色）
佐渡石臼
鞍馬石
青石
チャート
市道 中央3-1号線
市道 西大田町秋山岸通線

図 3－11　庭石分布図

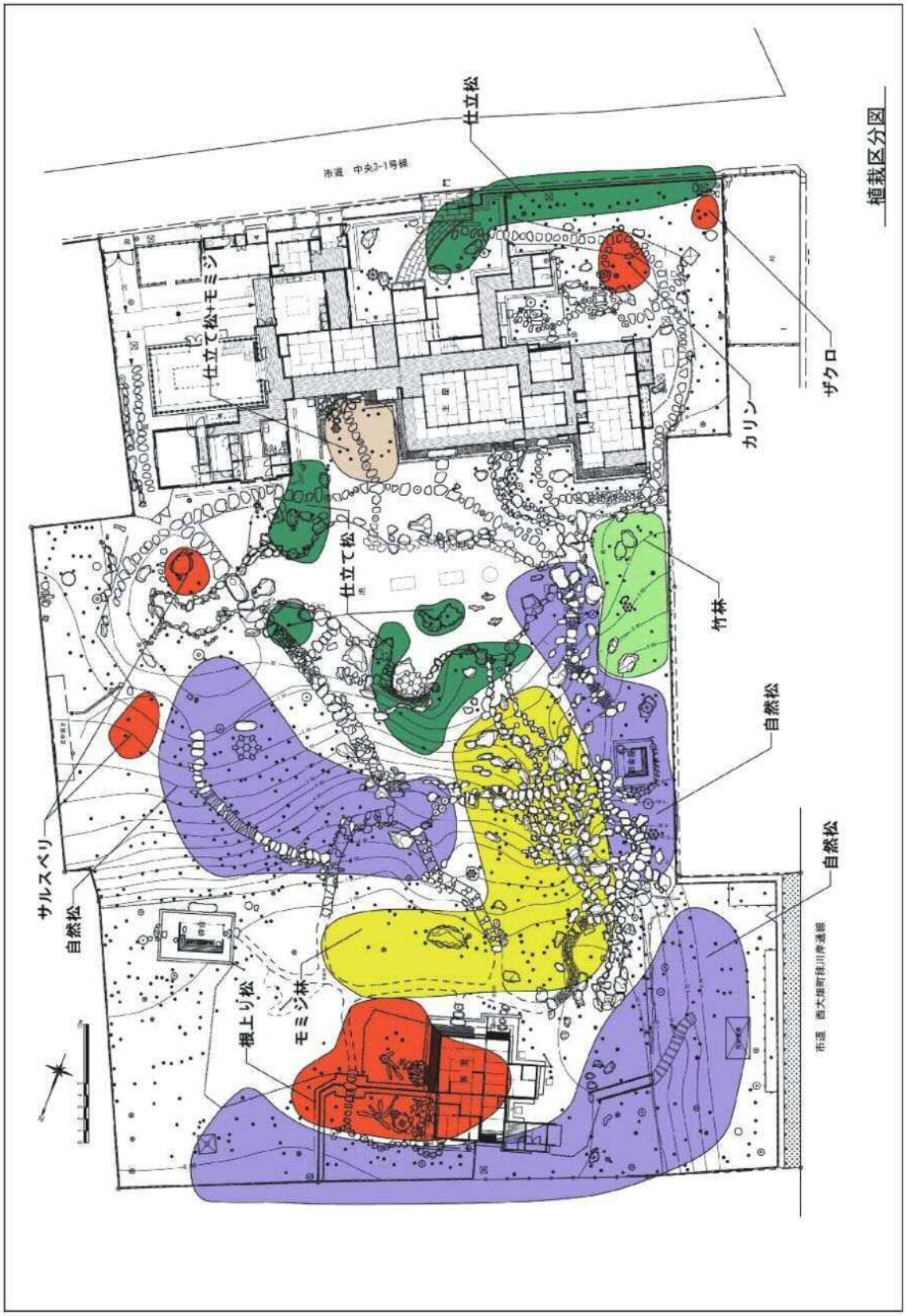

植栽区分図
仕立松
市道 中央3-1号線
仕立て松+モミジ
ザクロ
カリン
仕立て松
竹林
自然松
自然松
サルスベリ
自然松
根上り松
モミジ林
市道 西大加町桜川岸通線

図 3－12　植栽区分図

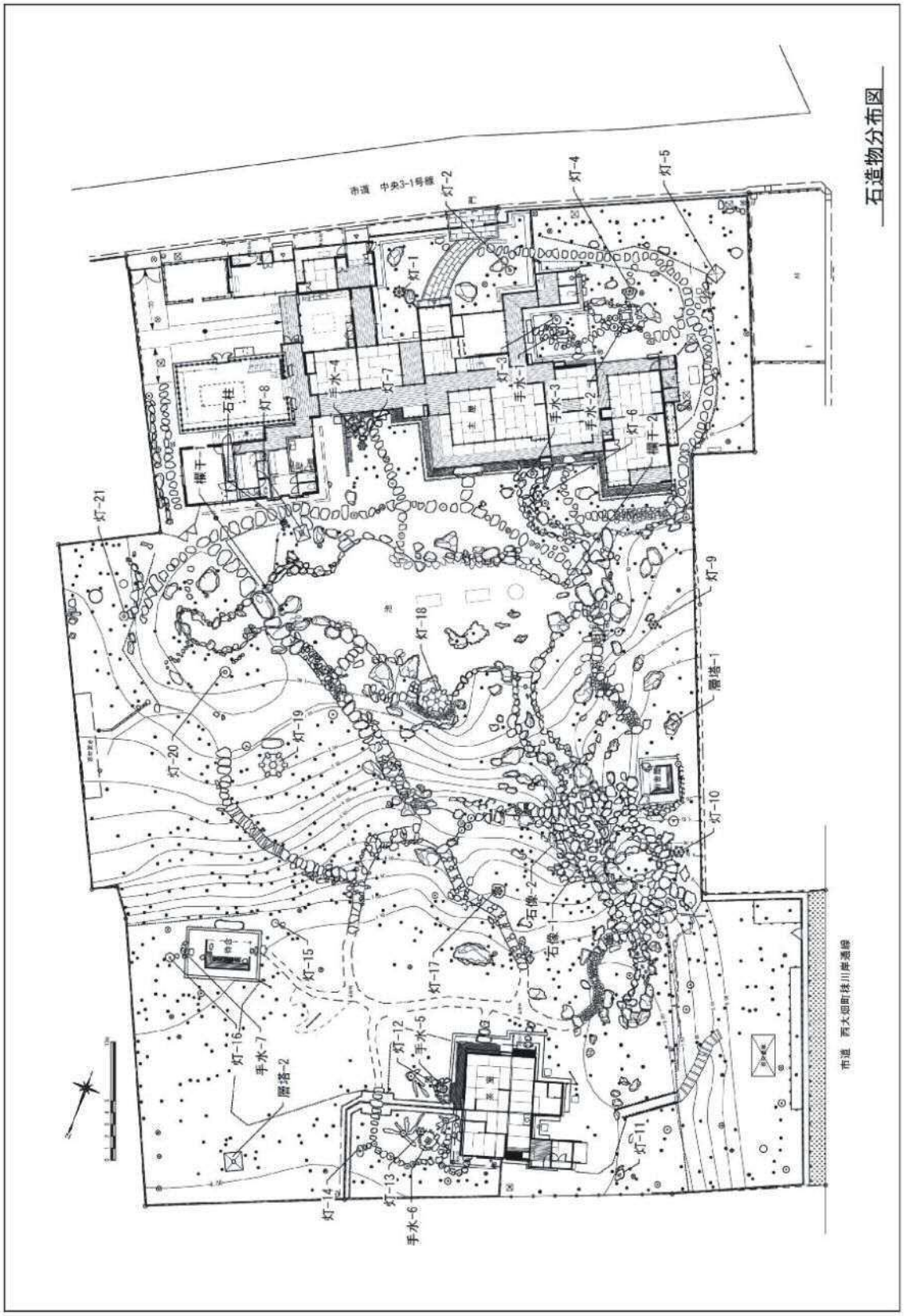

石造物分布図
市道 中央3-1号線
灯-1
灯-2
灯-3
灯-4
灯-5
灯-6
灯-7
灯-8
灯-9
灯-10
灯-11
灯-12
灯-13
灯-14
灯-15
灯-16
灯-17
灯-18
灯-19
灯-20
灯-21
手水-1
手水-2
手水-3
手水-4
手水-5
手水-6
手水-7
横手-1
横手-2
石柱
層塔-1
層塔-2
石像-1
石像-2
市道 西大畑町妹川岸通線

図 3－13　石造物分布図

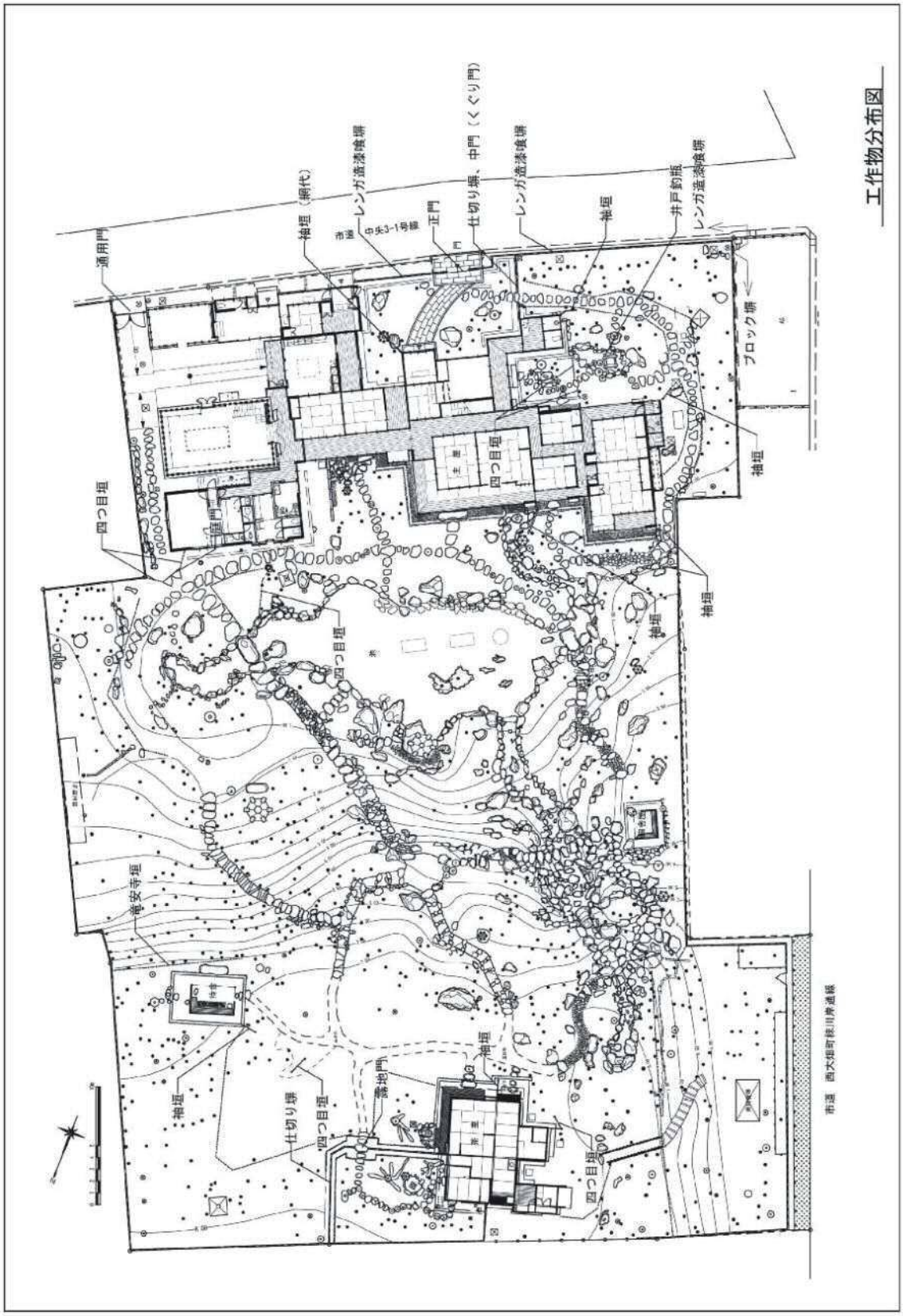

工作物分布図
通用門
袖垣（網代）
レンガ造漆喰塀
市道 中央3-1号線
正門
仕切り塀、中門（くぐり門）
レンガ造漆喰塀
袖垣
井戸釣瓶
レンガ造漆喰塀
ブロック塀
四つ目垣
四つ目垣
袖垣
袖垣
四つ目垣
袖垣
善安寺垣
袖垣
仕切り塀
四つ目垣
露地門
袖垣
四つ目垣
市道 西大畑町鶴川岸通線

図 3－14　工作物分布図

表 3－3　主要石造物一覧表

No.	灯-1	灯-2	灯-3	灯-4
寸法（mm）	H=2100,W=900	H=2250,W=600	H=1350,W=540	H=2100,W=540
形式	八角形	丸形銅製灯籠	丸形生込み	利久形（遠州形）
材質	花崗岩	銅,花崗岩（基檀のみ）	花崗岩	花崗岩
所見	元は、宝珠の先端が鋭く伸びていたようだが、欠けてしまっている。また請花もない。笠の軒が薄い。火袋は虎、獅子、牡丹、竹の彫刻で飾られており、中台は「卍」を反転させた彫刻が施されている。彫刻も多く、返花のそりが大きく鋭い、華やかな灯籠である。	宝珠が炎のような意匠になっており、笠にはドラゴンが舌を出している姿を表現した蕨手がついてる。中台の格座間には「五三桐」と「丸に片喰」の紋が、基礎には走り獅子紋が刻まれている。竿には「昭和九年戊秋造之北越地蔵堂住人御釜師堀政五郎浄親」と刻銘されている。	笠の球形の彫刻を始め、火袋、中台、竿ともに円形で丸みを帯びている。竿部の風食が著しいため、エポキシ系樹脂等による修復および補強が必要である。蹲踞灯籠として用いられており、バランスがよい。	書籍によっては遠州形とも称される。利休形の通常のものより、宝珠の先端が天に向かって長く伸び、また竿部の節が厚いため、バランスが悪い印象を受ける。なお、一度落下したのだろうか、宝珠の先端が欠けている。

No.	灯-5	灯-6	灯-7	灯-8
寸法（mm）	H=2700,W=960	H=2250,W=720	H=1800,W=540	H=1650,W=960
形式	宮立形	六角形	春日形	四角形（宮立形に似る）
材質	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩
所見	本来、神前や仏前用の灯籠である。ただし、表面が水磨き仕上げでなく、ノミ切り仕上げ（ミシリ仕上げ）となっており、庭園で使用するための工夫がなされている。しかし、あまりに直線的・人工的な石燈籠であるため、違和感を覚える。	笠は波形であるが、照りが強く起りが弱い。軒が薄く30mmしかなく、火袋に比べて笠の軒が薄すぎる印象を受ける。火袋の四面には立連子が刻まれている。なお竿の節が突出しており、「灯-1」と薄い軒や竿の造りなど、特徴が酷似している。	この灯籠も「灯-1」「灯-7」と同様に軒がかなり薄い。全体的に細身でバランスが良いが、宝珠が短く太いため少しバランスを欠いているように思える。請花と蕨手の一部に破損が見られる。手水-4の蹲踞灯籠として用いられている。	笠や中台、竿、全てが直線的であり、蕨手がないことから宮立形であると考えられる。火袋がないため、灯籠としての機能を有していない。火袋は昭和39年（1964）に発生した新潟地震の際に失われた可能性が高い。

No.	灯-9	灯-10	灯-11	灯-12
寸法（mm）	H=1950,W=720	H=1800,W=720	H=900,W=840	H=1800,W=390
形式	六角形生込み（光悦形に似る）	春日形	化灯籠	四角形（西ノ屋形に似る）
材質	安山岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩
所見	光悦形に似ているが、笠の形状、火袋の彫刻、竿の節などが少し異なる。しかし全体的には良く似ているため、光悦形を参考にして作られたものだと考えられる。笠は丸みを帯び、重量感がある。樹木や竹が鬱蒼としている奥に、その重量感のある姿が隠見されて面白い。	宝珠の先端が長く伸びる。全体のバランスと比べ宝珠が少し大きい印象を受ける。大きな破損等はなく、ほぼ完全な状態である。火口にはガラスがはめられ、火袋内の電球に電気を供給するコードが伸びる。	極度の風化が進んでおり、火袋は消失し存在しない。灯籠としての意味をなしていないが、茶室の奥に位置し、あまり人が通らない場所のため、そのまま放置しても問題ない。	西ノ屋形に非常によく似ているが、竿に緩やかなくびれがある。笠の軒は厚く、垂木等の装飾は見られない。火袋には仏のような彫刻がある。手水-5の鉢明りとして用いられているが、背が高いため、手水鉢とのバランスが悪い。

No.	灯-13	灯-14	灯-15	灯-16
寸法（mm）	H=1200,W=390	H=1500,W=720	笠：W=640	H=900,W=630
形式	六角形生込み（光悦形に似る）	化灯籠	六角形	六角形寄灯籠
材質	花崗岩	花崗岩	安山岩	花崗岩
所見	光悦形に似た「灯-9」と同じ形である。但し材質や各部の大きさなどは異なる。こちらは手水-6の鉢明りとして用いられおり「光悦形」本来の大きさに近いが、「灯-9」と同様に火袋の彫刻や竿の節などが異なる。	笠の前面にセリ矢の跡がある。化灯籠にしてはバランスのとれたものである。但し、基礎の材質が竿など他の部位と異なるため、その接合部に違和感を感じる。茶室内からこの灯籠を見た際、「灯-13」と重なって見えてしまうため、違和感がある。	昭和39年（1964）の新潟地震で倒壊したのか、各部位が基礎の周辺に散在している。基礎、竿、中台、火袋、笠、宝珠の各部分は存在する。しかし、火袋は大きく割れている。各部分に枘と枘穴はない。火袋を修復すれば利用可能である。	笠が二重になっている独創的な寄灯籠であるが、バランスが悪く美しくない。火袋と一段目の笠は同質でサビ色の強い花崗岩である。二段目の笠は、その形状から雪見灯籠の笠であったものを再利用したものだと考えられる。待合の脇にあり、存在意味は不明。

No.	灯-17	灯-18	灯-19	灯-20
寸法（mm）	H=2400,W=780	H=2100,W=1200	H=5100,W=1110	H=1050,W=720
形式	春日形	山寺雪見形	般若寺形	三脚雪見形
材質	花崗岩	花崗岩	花崗岩	安山岩
所見	中台の格座間は二区に分かれ、十二支紋が彫られている。本庭園に多くある灯籠の特徴である「笠の薄い軒」と「突出した竿の節」という二つを備えており、同一人物の作である可能性が高い。「灯-1」「灯-6」も同様。昭和前期に撮影された古写真にその姿が確認できる。	稲田石（花崗岩）を使用している。笠に照りや蕨手があるため、山寺雪見形といえる。修学院離宮に似たようなものが存在する。しかし、本灯籠は脚が花頭形でなく茨である。その姿は大きく、池の中央部に位置し、点景物として目立つ。倉田六治の作である。	彫刻など少々異なる点もあるが、宝珠の形態から般若寺形といえる。火袋には牡丹、獅子、鶴、霞の彫刻、中台の格座間には十二支が彫られている。基礎の格座間にも鳥、兎、雲の彫刻がある。この笠の軒も他と同様薄めである。竿の下部に欠損があり、修復の必要がある。	「灯-9」と石質が同じであり、他に同様のものが見当たらないため、本灯籠と「灯-9」は同じ時期に作られた可能性が高い。小ぶりでバランスがよい。本庭園の中でも秀逸な作品。笠には補修痕がある。

No.	灯-21	層塔-1	層塔-2	手水-1
寸法（mm）	H=1800,W=600	H=4500,W=1000	H=7300,W=1200	H=400,W=1100,D=600,φ400
形式	丸形（滝見形に似る）	十三重石塔灯籠	十三重石塔	自然石（司馬温公形に似る）
材質	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩
所見	滝見形に似ているが、本灯籠は生込み形ではない。他の灯籠と同様、昭和39年（1964）の新潟地震の影響か、火袋を失っているため、灯籠としての機能を逸している。存在の意味がないため撤去しても問題ない。	石塔と同じような形であるが、塔身に火袋を掘り灯籠とし、尚且つ下部を基礎とせず茨形の四脚としている。なお、笠は十三重である。相輪部は昭和39年（1964）の新潟地震で落下し、宝珠は脚元に宝珠以外は四阿の背後で土留めとして利用されている。	層塔-1と同様、昭和39年（1964）の新潟地震によって相輪が落下し、そのまま放置されている。相輪には小さな枘が確認できる。大きな傷はない。なお塔身は四方仏である。	自然石の手水鉢である。司馬温公が大きな水瓶に落ちた友達を救うために、高価な水瓶を割り、命を助けたという故事に由来する、司馬温公形に少し似る。

No.	手水-2	手水-3	手水-4	手水-5
寸法（mm）	H=600,W=1200,D=1200	H=750,W=1100,D=800	H=900,φ600, 内φ360	H=370,W=600,D=600,φ500
形式	井桁形	自然石	棗形	四角形
材質	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩
所見	全体的に丸みを帯びており、人工的過ぎず良い。この井戸は枯れ流れの中に設けられているが、自噴していたかは定かでない。煎茶趣味的要素の強い空間を演出している。	鞍馬石（花崗岩）を加工した縁先手水鉢である。水道による近代的システムを備え、水が湧き出し、オーバーフローした水は下に据えられた赤玉石に落ちる。その水は薄い流れとなり池に注がれる。本庭園の中でももっとも凝った意匠と言え、大変美しい。	棗形の縁先手水鉢である。加賀田家所有の昭和57年（1982）に増築棟が建てられた際、取り壊された「湯殿」に付設してつくられたものである。現在は周囲の建物との関連が断ち切られており、使用が困難である。	四面に走り獅子紋が刻まれており、彫りが深く美しい。外露地において縁先手水鉢として機能している。丸みを帯びた台石の上に置かれアンバランスであるが、その危うさが何とも美しい。筧は塀の内側つまり内露地から伸びている。

No.	手水-6	手水-7	欄干-1	欄干-2
寸法（mm）	H=650,W=450,φ450	H=300,W=600,D=400,φ200	H=1300,φ330	H=1200,W=270,D=210
形式	四方仏形	自然石	橋杭形灯籠	橋杭形灯籠
材質	花崗岩	花崗岩	安山岩	花崗岩
所見	四方仏形の手水鉢で、中鉢形式の蹲踞を構成する。筧が長く、塀を貫き外露地にある「手水-5」まで続く。四方仏の彫りが甘い。直線的な構造で、丸みを帯びた鉢明り用の灯籠（「灯-13」）や根上り松とともに幽玄な雰囲気を出している。	前石や湯桶石、手燭石を備えた向鉢蹲踞の形式をとっているが、存在の意味が不明であり、海に該当する部分が、腰掛待合の雨落ち溝をせき止めて作ってある。	東京都墨田区にあった浩養園の「御なりぼし」の欄干柱を売立会で購入し運んできたものである。バランスの良いその姿は、本庭園に品格を与えている。	「浩養園」の欄干柱と対になるように，もう一方の橋の脇に配されている。しかし、「浩養園」のものは四角く端正であるのに対し、こちらのものは丸い。橋とのバランスが良くない。昭和初年に撮影された16mmフィルムに写り込んでいる。

第 3 節 建造物の価値

建物の概要

旧齋藤氏別邸庭園は、砂丘地形を最大に利用しながら人工的に造りあげられた自然環境が、各建物と一体となった作品である。園内の要所には門が配され、起伏に富む散策路沿いの田舎屋や待合でたたずむことができる。庭園の焦点のひとつとなる滝は、当初から電気を動力とし、水道水を落とす仕組みからなり、まさに近代的な発想にもとづいてかたちづくられている。この庭園を四季折々に鑑賞し、楽しむための場所として接客に重きを置いた主屋と茶室が庭園と同時期に設けられている。

旧齋藤氏別邸庭園の敷地内に立つ主屋と茶室をはじめとする各建造物は、それぞれが国指定名勝旧齋藤氏別邸庭園を構成する要素である。保存及び活用においては、庭園との連続性を重視しながら、各建造物の特徴を継承できるよう十分に留意する必要がある。2011 年 9 月から 2012 年 3 月の主屋の構造補強を中心とする保存修理は、建造物の特徴を継承するべく十分に留意しながら実施された。

本項では主屋を中心として、名勝庭園を構成する建造物について述べる。

立地　敷地中央から北に向かって主庭を広くとった庭園内の主屋は、敷地南側に寄せて、表通りに面する正門近くに配置されている。このため前庭が狭く、門から主玄関に至るアプローチも短い。最も大きい建造物である主屋の東側に土蔵が 2 棟、主庭の急斜面の上には茶室 1 棟を設けている。庭園内には、「田舎屋」と呼ばれる四阿（あずまや）、茶室の待合、各庭への出入口となる門塀が設けられている。さらに、主屋北東には昭和時代後期に建築された「増築棟」が取り付く。

大正時代初期に、齋藤喜十郎によって建設された屋敷地は、本宅のある新潟の市街地中心から離れた、当時としては比較的新興の住宅地にある。もとの地形を最大限にいかし、東京から庭師を呼んで造られた庭園を楽しむために、主屋及び他の各建造物は計画された。この設計には喜十郎が深く関わったと伝わる。

平面計画　主屋は、東側を下手とし、脇玄関や台所、女中部屋を配置するが、竈のある薄暗い土間空間はない。

接客空間である、庭園への眺望が順光のもとで得られる 1 階の座敷には主玄関から廊下を隔てるだけで直接入れる。上客が利用した 2 階の続き間も玄関近くの階段から上がることができる位置にある。一方、仏間や家族の居室は、座敷の西側に置かれ、従来の建物内の配置による部屋の下手・上手という格式を尊重するよりは、庭園を楽しむ部屋をのびのびと、庭園前の敷地の中心に据えたのである。

雁行する主屋各室西の最奥に設けられた喜十郎夫妻の部屋へは数段の階段を上がった廊下から入る。他の部屋より地面から少し高くなっただけで、空間移動を意識させ、さらには庭園への視点が変化する。他の部屋でも庭との関係が意識され、主屋にとりつく数々の袖塀によって、庭への視点が小さく区切られている。

近代性　旧齋藤氏別邸庭園が造られたのは、日本の伝統的な建築が目覚ましく発展していた時期であった。幕末の開港以降に建てられた近代洋風建築は、その外観より導入された西洋の技術や意匠が取り入れられた作品であることが認識できる。一方この時代には、和風建築においても同様に近代化が図られ、空間構成から建築細部や設備類に至るまで、時代背景を反映する新たな建築文化が展開されていた。全国各地の和風を基調とする住宅においては、広く西洋からの影響を主に接客用の棟や部屋あるいは細部意匠に取り入れるようになっていた。そのような時代の中にありながら、齋藤家の各建造物では、徹底して和風が追究されている。

近代の情報網と交通網の発達を利用し、普請のための資材は広い地域から持ちこまれた。多様な産地からの最良の材料と確かな職人たちの腕によって、豊かな建築と細部意匠が実現された。一貫した数寄屋の思想が、各部屋の造作や襖・障子・板戸・欄間等の建具類については表装・仕上げ・金物類を含め、さらには便所のしつらえに至る建物の細部まで及んでいる。

主屋と茶室だけでなく、庭園の斜面に建てられた田舎屋と待合にも同様の好みが濃厚に現れている。

構造　座敷は1・2階とも、開放的に造られている。特に縁廻りでは庭への視界を遮る柱が省略され、続き間境の位置の1本のみとする。柱間を広くとることで柱も華奢に見え、さらに建物の重量を意識から打ち消す。2階では天井も高く、まさに窓から見る空へと一体となったような浮遊感が得られる。外部では庇屋根を銅板葺とし、軒先を薄く見せることで一段と軽く見える。

このような空間を実現するために、主屋と茶室ともに小屋組（屋根の構造）や懐（ふところ：1・2階の天井と床との間）には、近代になり日本に入ってきた洋風の建築技術が見られる。木部を縦横に組む伝統技法に対し、部材を斜め方向に組み合わせて、強固な構造とするトラスの技法を応用して水平方向に斜材を菱形に組み、構造の剛性を高めている。小屋組も深い軒を支えるために、梁先端を桁を越えて延ばした特殊な構造とし、さらに和小屋を斜材で補強している。（断面図参照。）

また、土壁については、従来の貫構造だけでなく、大正時代以降に広まる筋交（すじか）いをも導入している。建設以来自然災害に幾度と見舞われながらも、大きな被害の記録がなく維持されてきたのは、耐震性の高い建物として当初から設計されていることに加え、所有者が幾度か変わった中でも、常に維持管理がなされてきたことがあげられる。

採光と明かり　側廻りの建具にガラスを多用することで室内は明るく、寒い季節にも快適に暮らし、接客に利用できるようになっている。主屋では、他の地方では一般的に板戸とする雨戸に腰付のガラス戸を用いている。（ガラス戸の雨戸は新潟では広く見られ、明治時代末に国産ガラスが流通するようになってからの慣習と考えられる。）側廻りの一溝（ひとみぞ）の敷居・鴨居に建て込まれていることにより、建具を戸袋に納められ、開け放すと引違いのガラス戸よりもさらに開放的になる。

また、建設時から電気照明が採用され、主屋と茶室の各部屋に灯具が残されている。今日ほど灯数も明るさもない照明器具の位置や照度によって、空間演出がなされたことが想像される。特に夜間に見る、各室のしつらえに注目したい。(佐藤紫煙の絵襖は、夜間の客を迎えるためか、屋外が明るいと見にくい場所にある。一方、夜に大正時代当時のほのかな電灯のもので見ると、玄関正面及び2階踊り場の絵は映えて見えるのではないか。)

各建造物の特徴

主屋　北側の主庭と一体として計画され、敷地の南に寄せられて立つ東西に長い雁行型の平面からなる主屋は、入母屋造、桟瓦葺、2 階建の座敷棟を中心として構成される。南側に入母屋造の主玄関を設け、座敷の西に寄棟造の居室棟、東に内玄関とのある入母屋造の棟、これらを東西方向に繋ぐ。座敷棟以外はいずれも平屋である。1・2 階とも続き間の座敷の廊下を挟んで配置し、比較的小さい和室が続く。柱間の計画寸法は柱真を基準に 1 間を 6 尺（1,818mm）とする江戸間で設計されている。

主玄関から西を主たる接客・居間空間、東を下玄関・台所・女中部屋等からなる下手とする。接客・居間空間の各部屋からは、それぞれ異なる趣の庭が眺められる。2 階座敷は「残月亭」と呼ばれており、ここからは庭園全景を展望できる。

座敷空間は、床の間、棚、部屋によっては書院を備え、床廻りや天井などに銘木が多用され、欄間も凝った造りとなっている。それぞれ異なる趣向でまとめられている。また、日本画家・佐藤紫煙(1873～1939)の落款がある板戸絵が、1 階に 2 か所、2 階に 1 か所建て込まれている。

近代の建造物に見られる一般的な傾向として天井高を高くしている。三重に梁をかけた和小屋には、トラス様の補強材、松丸太による水平ブレースが導入されている。

茶室　敷地の庭の最も高い位置の北奥に位置する建物で、周囲を茶庭とする。

桁行3間、梁間2間半、入母屋造の構造に梁間2間、桁行2間の入母屋造が直行した桟瓦葺の主体部に対し、西面に便所と玄関部分を接続する。外壁腰部を杉皮張り、面皮柱を使用する点などに、数寄屋趣味が見られる。

茶室南面の西隅には入口があり、その北側の上がり縁を経て、畳廊下に通じる。畳廊下東側には炉を2箇所切った座敷8畳がある。座敷8畳の西面には上床があり、北面には床がある。南面と東面には障子戸が入り、外側は竹で設えられた縁が廻っている。座敷8畳は竿縁天井、縁の軒裏を網代天井とする。

茶室北面の東側ににじり口を設けた茶室4畳がある。西側に床を設け、南側の天井を蒲天井とする。東側の半間分は網代天井で西側1間分は竿縁天井である。

茶室 4 畳の南側は畳廊下となっており、その西側は両茶室で使用する水屋となっており、流しのある脇間、玄関へと通じる。便所は座敷 8 畳の畳廊下に接続される。

北土蔵　構造形式：木造、切妻造、妻入、桟瓦葺、2 階建、梁間 3 間、桁行 5 間。

通り沿いの土蔵 2（南土蔵）の北側に東庭を挟んで立つ。主屋東廊下に、戸前のある西面

を接続する。

幾重にも重ねる軒廻り鉢巻きの左官仕事は、側面を黒く、下面を白色にすることで軒廻りに縁取りを入れたようにくっきりさせる。鏝絵による七曜紋（加賀田家の家紋）が妻拝み飾られている。切石積みの上に土台を廻し、柱を 1.5 尺間隔で立てる。水切下の外壁袴を北面では海鼠壁、南面・東面を縦板張りとする。

窓開口部の庇が外観を特徴づける。鍛鉄の持ち送りの細部は唐草のように渦巻き、屋根は波板鉄板からなる。（当時の波板鉄板は輸入品であった可能性もある。）外部に鎧戸、鉄帯からなる面格子、内側には土戸と網戸の引き戸を備える。

室内の廊下に面する西面の出入口は、黒漆喰塗の鳥居構え、左官仕事による観音開きの土戸で、面を白くする。内側には、土戸・板戸・格子戸。床は板張りとする。南西隅の階段から 2 階に上がる。

小屋組は、桁行方向の中央に曲がり梁を架け、中央に立てた棟束に棟木を乗せる。母屋はなく垂木に化粧裏板を張る。

1.5 尺間隔で配置された柱は、荷擦り木を兼ねる。室内に貫を見せて土壁を造る。

南土蔵　構造形式：木造、梁間 2 間（10 尺）、桁行 3 間（18 尺）、切妻造、桟瓦葺、平屋。

敷地の南東隅、表通りに面して立つ。

敷地南側の通りに面し、西側は主屋土間と接続する。コンクリート基礎に石積みに模した目地を入れ、海鼠壁周囲の額縁はモルタル塗洗い出し仕上げ。外壁は袴を海鼠壁（南面・東面）及び縦板張り（北面）、上方は白漆喰仕上げ。

2 尺ごとに柱を立て、室内は凝灰岩敷きとし、壁は白漆喰塗。西面の出入口には鳥居枠や鎧戸を設けずに額縁のみの簡素な造りとする。窓開口部は、鉄帯の面格子、内側に片引きの土戸。柱位置では土台下に礎石を配置し、床から上げて湿気を防止している。

桁を妻梁の上に置く折置き組、小屋組を受ける梁は西壁から 6 尺入った位置で桁に架け、束を立て、小梁上の棟束に野棟木を乗せる。

田舎屋　構造形式：梁間 1 間（6 尺）、桁行 1 間半（7.5 尺）、寄せ棟造に杉皮葺小屋根付きの箱棟を乗せ、茅葺、屋根面に杉皮を敷く。天井は方形（ほうぎょう）。

主庭の西側の中腹に、東面する。

なぐり仕上げの柱を礎石立ちにし、西・北面に土壁、南・東・北面東間を開け放し、北面西間に丸窓。北東隅柱の断面は六角形、他は角柱。柱間に幕板を廻す。外壁は北面と南面の腰部に網代を張り、西側は杉皮張りとする。丸太の化粧垂木に吹き寄せの木舞野地、軒裏には杉皮を張る。内部は葦天井。床は乱形石敷きとし、西面と北面に腰掛を設ける。

待合　構造形式：梁間 1 間（7.5 尺）、桁行 2 間（12 尺）、寄棟造、銅板葺、東側差し掛けも銅板葺き、小便所を置く。小便器は青磁の陶器製、竹穂で作った蓑傘をかぶせる。

北西及び北東の隅柱には、竹垣に竹穂をかぶせた袖塀。

茶室南東側の斜面上部に南面して立つ。

丸太柱を礎石に立て、柱間に幕板を廻す。桁は杉丸太。北面・東面・南面東間（丸窓）、西

面北間（長方形の窓、隅切り）に土壁、他の間は土壁の垂れ壁。外壁腰部には竹材を開いて張り、水切と押さえ縁はなぐり仕上げ。軒裏及び天井は網代張りとする。北面と東面には腰掛を設け、見晴らしの良い南西側を開口とし、両面に踏み石を置く。

正門・塀　主屋玄関から前庭を隔てた西寄りに正門を置く。敷地正面南側の南西隅から、正門を越えて、南土蔵西妻まで塀が回る。東西の塀には異なる構造や仕様が見られるので、既存の塀を受け継ぎ、外観を整備の上使用されている塀もあると思われる。

門：三間一戸、切妻造、むくり屋根、桟瓦葺の棟門、柱を沓石に立て、肘木付腕木で桁を支える。軒は化粧垂木、化粧裏板。欄間の外側中央に電気照明器具を嵌め込む。2 式ある引き分け戸は外側を板戸、内側を格子戸とし、西の格子戸に潜り戸を設ける。外壁下方は立て板張り、上方を白漆喰塗とする。雨落ち内は切石敷き、敷居も石。

両脇に塀を設ける。東の塀は門の通りに立ち、通りのとの間を砂利敷きとする。西の塀は半間西の位置で鍵の手に折れ、道路沿いに通る。

塀（東）：高い石積み基礎に土台を乗せ、柱を立てる。外壁下方は下見板張り、上方を白漆喰塗とする。腕木で桁を支え、屋根は一文字瓦の桟瓦葺き。

塀（西）：高い石積み基礎上に立つ大壁造、躯体は煉瓦造。蛇腹で軒を持ち出し、屋根は唐草瓦の桟瓦葺。敷地西面では、コンクリート塀に雁振瓦を乗せた塀へと続く。

中門・塀　玄関庭と中庭との境に立ち、両脇に続く塀と桟瓦葺の屋根を一続きにする。軒は腕木で支え、化粧垂木、化粧裏板。

門の柱は沓石に立つ。鴨居上には襷（たすき）欄間、片引き戸。布石上に土台を置き、塀を建てる。下方を下見板張り、上方を鼠漆喰仕上げとする。

井戸屋形　柱を 1 本立て、桁を貫通し、井戸の上へと差し伸ばす。釣瓶の上には小さな銅板葺の屋根を掛ける。棟はなく、2 箇所に押さえを置くことで屋根葺き材を納めている。この屋根は、棟の位置で銅板を切り替えずに、続きの 1 枚としている点において、茶庭前面の塀と似ている。井戸枠は石造。（注　詳細な建築時期は不明であるが、歴史文化課の実施した聞き取りによると、齋藤家のもとで働いていた庭師が加賀田時代にも引き続き庭の手入れをしており、加賀田氏の指導のもとこの庭園にふさわしい井戸屋形を造ったとのことである。）

庭門　構造形式：棟門、2 戸、切妻造、銅板一文字葺（蓑甲（みのこう）あり、当初は柿葺か。）

通用門から隘路を経て庭に出る位置にある。今日は管理棟北東隅に接続するが、この位置に離れがあった時の庭への導入路に当たる。

柱は礎石立ち、両面から腰高の控え柱で支える。柱・棟木・母屋をいずれも丸太とする。柱に差した腕木で桁を支え、垂木も丸太、化粧木舞、野地は葦。鴨居は丸太を六角形の断面に太鼓落とし。欄間は丸竹を 2・3・2 の配置とする。

両開きの戸上方は粗い格子とし、庭の雰囲気を戸越しに垣間見ることができる。矢形のなぐり仕上げの立て板張り、細い竹材で押さえる。

現在は両脇に竹垣が設けられているが、柱にはかつての脇塀取り付き痕が残る。

茶庭門塀　　茶庭のうち、茶室東側を門塀で囲み、南面から入る。

門：構造形式：棟門、切り妻造、杉皮葺き（竹の棟押さえと押さえ縁）

礎石立ちの角柱は、なぐり仕上げ。観音開きの戸上方には松皮菱の組子を入れ、帯には七宝の透かし彫り、腰は杉板。鴨居はなぐり仕上げ、庭の外から続く飛び石を門位置では大きな踏み石とし、敷居はない。棟木と母屋は丸太、欄間は丸竹、化粧垂木は丸太と角材を交互に配し、なぐり仕上げの化粧木舞、軒裏は杉皮張り。腕木で桁を支える。

塀：比較的せいの高い布石に土台を乗せ、柱を立てる。柱間には幕板。塀内外とも、腰を杉皮張りとする。腰より上は、土壁中塗仕上げ。柱に差した腕木で支える、柱位置だけに配置された化粧垂木は、正面から見えないように下端をそり上げている。柱間は板軒。

屋根は、内外の軒を巻く様に葺き、棟位置も続けて葺き、棟木もない。（棟位置両端の門柱及び茶室壁にも棟木の取り付いた痕跡は見られない。）欄間にはヨシズが下げられている（ヨシズを吊す金物は更新されているが、額縁には以前よりヨシズのようなものを吊した金物の痕跡が見られる）。

その他の建物

管理棟　　昭和 57 年（1982）築の既存の住宅棟を、公開活用に当たって来館者用便所及びボランティア室及びスタッフ休憩室として利用するために、部屋割及び階段位置を変更し、外観を和風に整備した。廊下から北土蔵の外壁海鼠壁が見えるように窓を設けた。

東門　　敷地南東隅にある通用口。平成 23 年（2011）の整備工事時に、この位置にあった車庫を撤去し、敷地に出入りできる門として整備された。

旧齋藤氏別邸庭園の建築の価値

日本の木造建築は近代以降に導入された技術やかたちづくられた慣習に基づき、極めて高い水準に達した。各地に地域性や敷地の周辺環境、施主や設計者の個性を反映した、多様な規模、構成、意匠の優れた作品が完成されるようになり、住宅にも影響が及んだ。外観を洋風とする建物はその新しさが認識しやすいが、当時は和風建築においても新たな形式が追究されていた。そのような背景の中で発達した近代和風建築に分類される、大正年間に建設された旧齋藤氏別邸庭園の各建造物には、立地する新潟市西大畑周辺地区の地域性を背景として、砂丘地形を取り入れて一体的に造られた庭園と建造物、施主となった新潟の近代を代表する豪商・齋藤喜十郎家の好みを反映し、贅を尽くした室内空間や細部意匠が見られる。

一連の建造物は、様々な価値を有している。例えば、建築及び意匠的価値、歴史及び文化的価値、地区の景観資源としての価値などに着目できる。また庭園と建築とが一体となった旧齋藤氏別邸庭園は、西大畑周辺地区に集積する歴史的建造物の中核的存在であることから、これらを連携させた種々の文化的な活用をおこない、まちづくりを推進する際に拠点的な役割を果たす可能性を持っている。

具体的には、以下のような価値を有していると考えられる。

1 歴史的・文化的価値

(1) 別邸での暮らしの一端に触れることができる

贅を尽くした室内空間や庭園などからは、近代新潟の経済発展に貢献した豪商である齋藤喜十郎家の趣味や別邸での暮らしぶりをうかがい知ることができる。主屋の接客を中心とする各室と共に、裏方の部屋を含め邸宅建築の構成を良く残す。

一連の建物の利用は、齋藤家の別邸、進駐軍による接収（将校官舎）、加賀田家住宅と変遷を遂げる中、文化の拠点としても使われてきた。齋藤家が来賓を迎えた時の写真も多く残る。特に2代加賀田勘一郎は骨董収集と囲碁が趣味だったこともあり、加賀田家時代には「松鼓庵」と名づけた茶室や主屋を利用した茶会の開催、著名人の来訪、本因坊戦の開催など、多様な文化交流が展開されていた。

2 建築的価値

(1) 庭園と一体的に計画された住宅建築

主屋の座敷空間は砂丘の南斜面を活かした大庭園への効果的な視点場として設計されている。居間など各部屋からも、それぞれ異なる庭の景観が楽しめるなど、庭園と室内空間が一体的に計画されている。

(2) 近代和風建築の空間構成と意匠

多様な座敷空間から構成されている。特に主屋の各部屋には、それぞれ異なる材種の木材や意匠による床の間、棚、欄間、建具、造作類が見られ、多様で優れた室内空間が設けられている。また、全国の銘木、東京から取り寄せた工芸品など、卓越した材料や技法を用いて造られており、優れた座敷空間としての室内意匠、和風建築としての外観意匠からなる。

(3) 建築技術

建築技術を駆使し、屋根裏や天井裏に強固な構造を用いて縁廻りの柱を省略することで、最大の特徴となる開放的な室内空間は実現された。縁廻りの雨戸をガラス戸とすることで、四季を通して快適な室内環境が得られ、雨戸を戸袋に引き込めば室内は庭園と一体となる。

正門を表通りから見る　東に脇玄関・南土蔵

脇玄関・南土蔵・通用門

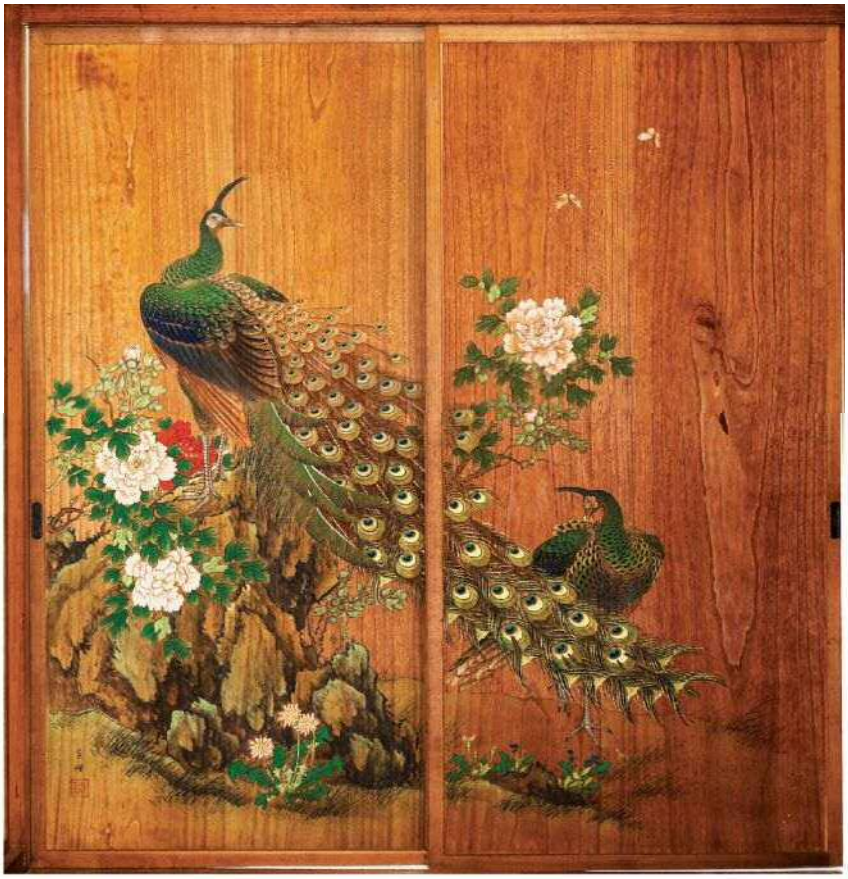
主屋　北から見る

主屋

主屋１階北縁　東を見る

主屋１階大広間から庭を見る

主屋



主屋１階東南端　板戸「牡丹孔雀図」
佐藤紫煙作

主屋１階大広間　西を見る

主屋

主屋２階大広間　床廻り

主屋２階大広間　東を見る

主屋

主屋２階北縁越しに庭を見る

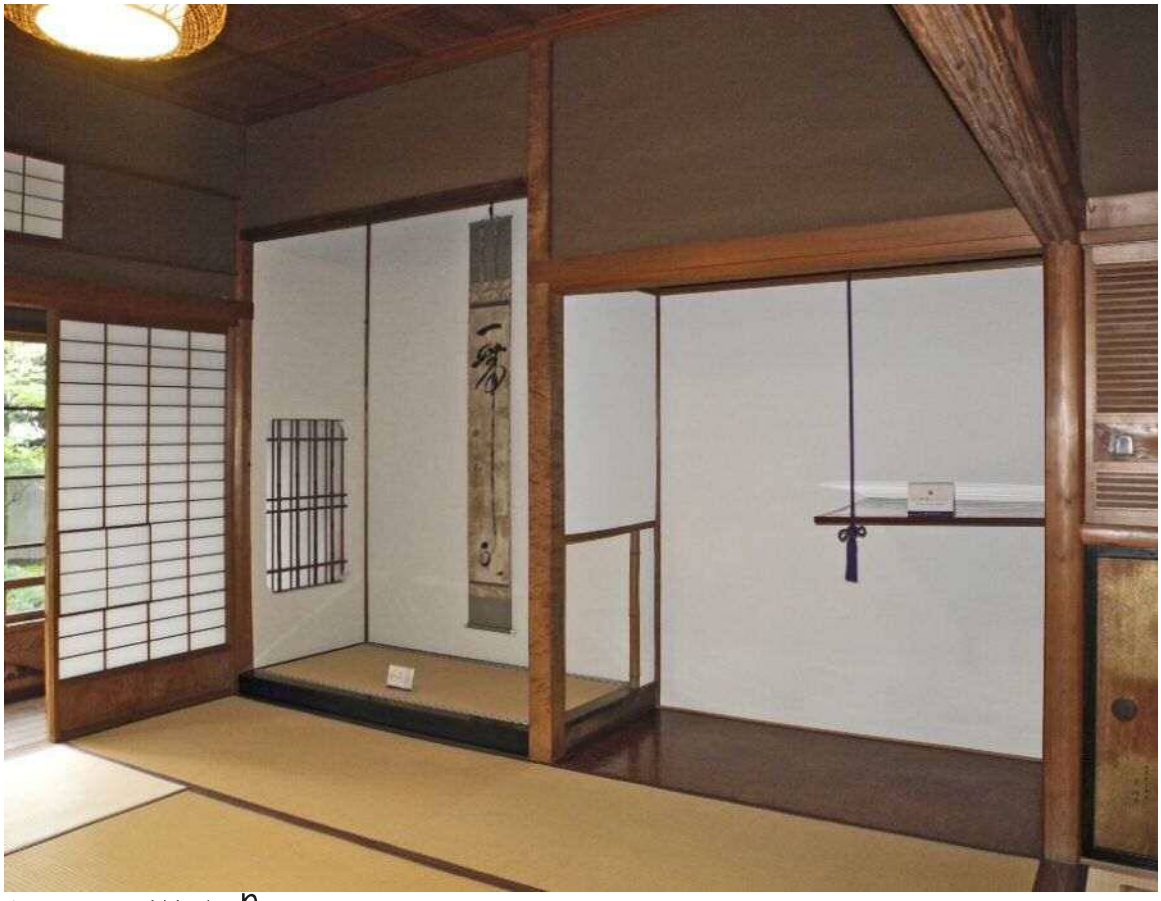
主屋２階階段踊り場押入　板戸「竹鶏図」/ 佐藤紫煙作

主屋２階便所　猪目型下地窓

主屋２階階段踊り場　照明器具

主屋２階大広間　床脇棚側板

主屋



主屋　西の間（南）床廻り

主屋　西の間　北を見る

主屋・中庭

西の間押入　板戸「花卉図」/ 佐藤紫煙作

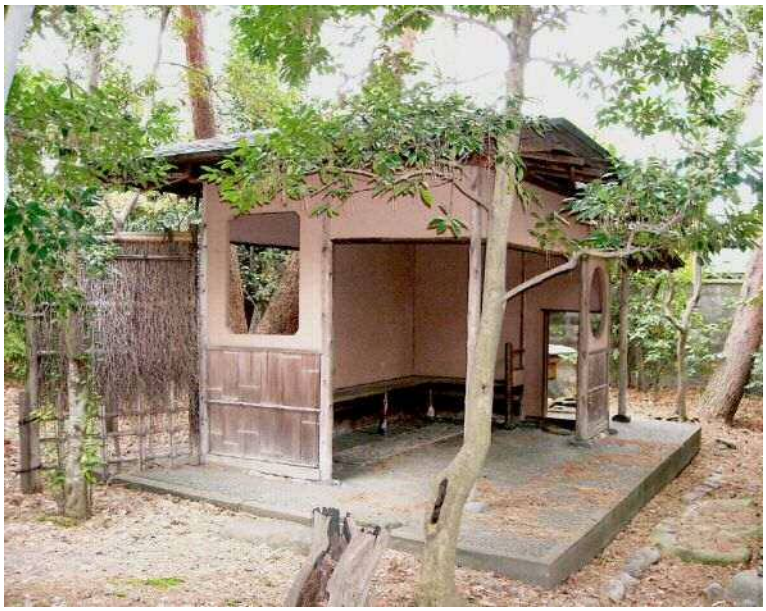
主屋西の間　南縁の高欄

井戸屋形

中門　東から見る

庭園の建物

茶庭門塀



待合

田舎屋

庭門

茶室

外観　南東から見る

室内

土蔵

南土蔵　南東から見る

北土蔵　南東から見る

土蔵

南土蔵　活用のために２階床を撤去

北土蔵
1　窓廻り詳細
2　東妻拝みに七曜紋 / 加賀田家の家紋
3　北土蔵引き戸には齋藤家の家紋
4　１階室内